“小さな群れよ、恐れるな。あなたの父はよろこんで神の国をくださる”（ルカ１２－２３）

小さな群れ

カトリック美唄教会
２０２３年　９月　№316
２０２３年８月２７日発行

Fr.Narciso Cavazzola ofm

９月の教会のカレンダーでは、聖マリアの誕生、十字架称賛などの祝日、聖マタイ福音史家、聖ミカエル、聖ガブリエル、聖ラファエル大天使の祝日、聖トマス西と 15 殉教者の記念日があります。また年間周期（22～25 主日）が続きます。

今年の年間周期では、マタイ福音書にそって、神の国に関する主要箇所が朗読されています。イエスが説かれた「神の国」とは、つまり「小さい者」へ配慮し、これらの人びとの重荷を引き受けることです。

８日には、聖マリアの祝日を祝います。この日は「全世界の希望と救いのはじまり」を祈る日です。心を新たにしてマリアと共に平和のたまものを祈り求めましょう。今、平和のために真剣に祈る必要があります。わたしたちの間の平和を大切に生きながら、人びととの平和、世界の平和をも希求し、祈っていきましょう。

24 日の「世界難民移住移動者の日」では、「移住かとどまるかを選択する自由」というテーマで、“ 教皇がメッセージ”を送られています。教皇が伝えているメッセージと教皇の意向に合わせて、共に祈っていきましょう。

2023 年 9 月　主日ミサ・平日のミサ予定

主任司祭　ナルチゾ神父

美唄教会　小さな群れ
2023 年　9 月　№316
2023 年　8 月 27 日発行

朝の祈り　「すべての命を守るキリスト者の祈り」

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時　間		
1	金		午前 10：30	ミサ後聖書に親しむ	
3	日	年間第 22 主日	午前 11：00		被造物を大切にする日 世界祈願日 ミサ後 運営委員会
8	金		午前 10：30	ミサ後聖書に親しむ	
10	日	年間第 23 主日	午前 11：00		
15	金		午前 10：30	ミサ後聖書に親しむ	
17	日	年間第 24 主日	午前 11：00		
20	水		午後　6 ：00	ロザリオの祈り	
22	金		午前 10：30	ミサ後聖書に親しむ	
24	日	年間第 25 主日	午前 11：00		世界難民移動車の日
29	金		午前 10：30	ミサ後聖書に親しむ	

《　平日のミサ　》　**金曜日のみ　午前 10：30**　1 ・ 8 ・15・22・29 日です
《 聖書を親しむ 》　平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日（敬省略）	清掃当番	花当番
14 日　ノトブルカ　　小川　ますみ	第 2 週　米通・三間 第 4 週　大城	大城

父母の開拓（その２）

ヨゼフ　　吉村道雄

滝野に入植

次の年昭和２２年春、国の政策に従い、北海道に引き上げ開拓者として入植した。「札幌群豊平町字滝野無番地」という竹藪の中である。恐らく今の滝野霊園のあたりだろうと思う。

先ずは小屋作りである。辺りの木を切り、円錐型に組んで頭を縛り、横木を縛り付け、刈り取った笹や芒を縛り付けて完成である。入口には一枚の筵を敷く。それこそ。もぐり込んで寝るだけの小屋である。国方さんという方が先に入植しており、随分世話になったと聞いている。後日広島村に移ってからも、私が三つ四つの頃に一度訪ねて来たのをうっすらと覚えている。

手鋸や鉞で木を切り倒し、手鎌で笹を刈り払い、根を掘り起こし、その年わずかに出来た畑に気休め程度の種を蒔く。

この辺りには色んな茸がいくらでも在り、旨そうなのを採っては食べていたそうである。あるとき「随分寝たような気がして外へ出てみると、作物が大分伸びていた。きっと１週間近くは寝ていたんだろうな、きっと眠り茸でも喰ったんだろう」とのんきに話していた。眠り茸なるはどの本にも載っていない。恐らくテング茸の仲間でも食べたのであろう。落葉茸はぬるぬるして気持ちが悪いから採らなかったとのこと。

その年の秋に私が生まれたのであるから、その茸の毒は母体を通じて私に入っていた筈である。もし今その影響が多少でもあるとしたら面白い話である。私が生まれたのは１０月である。もちろん産婆などは居らず、取り上げたのは父である。

産声も上げず、ぐたっとして、ぐにゃぐにゃとしていた。足を持って逆さにし、尻を数回叩いてみたがたいした反応もなく、これはだめだなと思いながらもぼろを被せて傍らに転がして置いた。そのうちにもぞもぞと動き出し、か細く泣き始めた。これが私の出産談である。

父はカルシウムが大事だと言って、近くの小川からカジカ、泥鰌、ザリガニ等を捕ってきて便が赤くなるほど食べさせたそうである。おかげで今でも歯だけは丈夫である。

吹雪の吹き込む掘建て小屋で、生木をいぶしながら一冬を過ごした。たとえ一つの買い物でも、あるいは役所の手続きでも、札幌までの無いような道を数里歩かなければならない。もちろんゴム長靴などは無く、ぼろきれを足に巻き、足首から脛にかけて紐で縛りつけて雪の中を行くのである。開墾の道具といっても、鋸、鉞、鎌、鍬、スコップ位しか無い。買い求めるにも金などあろうはずが無い。

しかし雪が解けると、待っていたように伐木、ササ刈りと開墾に精を出した。多少は畑も広がり少しは種も蒔いた。しかし程の知れた人力である。笹の根はやっと畑らしくなった所にも容赦なく伸びてくる。到底百姓一人の力の及ぶ所ではなかった。そうこうしている内にまた冬の気配が強くなってくる。

そんな折、広島村という所に平らで一面草原の良い土地があると言う話が聞こえてきた。笹の根っこ堀には辟易としていたところである。土地も見ずに来春行くことに決めた。

広島村に入植

昭和２３年春、やっと蓮が芽を出した頃、広島村の草原の中に立っていた。しかしそこは、７町歩の広さで葦、スゲ、牧草に似た草など、ほぼ湿地に生えるような草で一面覆われた泥炭地であった。ふわふわと、まるで水に浮かべた蒲団の上に居るようであった。入植地に南側に駅から西に真直ぐ延びる唯一の道路がついていた。道路と言っても、両側に排水溝を掘り、少しの砂利を入れただけの、ぬかるみと草だらけのひどいものであった。

土地のすぐ東側には音江別川の支流が流れていた。川幅は５～６メートル位もあり河床はきれいな細かい砂で、水は飲めるほど澄んでいた。流れも適度で、食物となるような泥鰌、ふな、うぐい、砂もぐり、えび、たにし等水生生物が豊富であった。南東の角から見渡せば、一面の草原に疎らな柳、榛の木が目路の果てまで続き、どこまでが与えられた土地なのか見当もつかなかった。

ここで最初にすることは小屋掛けである。建てる位置は南東の角に決めた。河原から柳の木を切り出し、骨組みとした。滝野の小屋よりは少し大きめにした。形状は同じである。辺りの枯れ葦を刈り、壁に縛りつけ、床にも敷いた。

私たちより先に入植した所は駅にも近く、土壌も良かった。駅からの坂の下には住宅が数軒並び、部落会館もそこにあった。少し下ると、引揚者専用の丁度炭鉱住宅のような横割長屋が４棟ほど建っていた。そこを越えると灯り一つない原野の中である。